
【舞踊評論家 [養成→派遣] プログラム】第2期生によるSpring Forward Festival 2025（イタリア・ゴリツィア開催）への派遣報告書

[タイトル]

『ダンスフェスティバルという世界
-Aerowave's Spring Forward Festivalという経験-』

中本 登子



Aerowaves' Spring Forward Festival2025 撮影筆者

舞踊評論家 [養成→派遣] プログラム2期生としてヨーロッパのダンスフェスティバルに初めて参加し、世界規模の「今の踊り」それは「踊りは今」を表していると確信し、それを世界規模で培っている人々に出会う事ができた。

Aerowave's Spring Forward Festivalについて

私が派遣されたAerowave's Spring Forward Festivalは2011年にロンドンを拠点に発足し、第1回がスロベニアで、その後は毎年イタリア、スイスなどヨーロッパ各地で行われ、コロナ

渦中もZoomで開催されているダンスフェスティバルだ。ヨーロッパ34カ国に広がる46のパートナー（内36カ国はプラットフォームのメンバー）がおり、EUの新進アーティスト育成のためのクリエイティブ・ヨーロッパ・プラットフォーム・プログラムから共同出資を受けている。

このダンスフェスティバルには様々なプログラムがあり、質の高いライティングとダンス批評の発展のため2015年から始まったSpringback Academyは、2018年にオンラインマガジンを創刊しライターの育成、ダンスシーンの特集記事の執筆も行なっている。また、ヨーロッパのダンスフェスティバルでの記事を集めた「Assembly」も作られている。そして新しいキュレーターに機会を提供するStartup forumは、毎年Aerowave'sのパートナー団体が候補者を最大10名で指名し、選抜された3名には帰国後にAerowave'sアーティストが参加するプロジェクトの資金援助が提供されるというものだ。

その他にもArtist Encounterは、様々な文脈で活動するインディペンデント・アーティストとの交流を促進し、またMoving Bordersは、強制的に国から避難させられたアーティストや市民の到着に対応するためのツールを提供することを目的としている。さらに、カナダのケベック州の海外におけるダンス公演と観客育成の向上・強化に努めるLa danse sur les routes du Québec、また日本の城崎国際アートセンターはレジデンスを、横浜ダンスコレクションは公演により今年から提携している。そして、SHIFT文化エコ認証を得て2023年からフェスティバル内ではベジタリアンフードに切り換え、水筒・ランヤードの持参、公共交通機関・交通機関のシェアード利用や徒歩での移動などにも取り組み、ダンスの企画・運営・制作・評論・研究・参加・生活まで補う育成を行っていた。

300近くいる世界中からやって来たゲストの中、約4日間ゆっくりと話す事ができたのは40名程だが、中には芸術的にも人間的にもとても近いなと感じる事のできる人が何人かいて掛け替えのない出会いを頂いた。ゲストはダンスフェスティバル、ダンスカンパニーディレクター、キュレーター、振付家、ダンサーなど。私自身が評論は元より企画・運営・振付け・ダンサー・美術・衣装デザイン・教師・研究の活動しているため、話した内容は主にフェスティバルの創設から運営・提携・助成についてだった。またカンパニーを持っているディレクターも多いのでこちらも同様の内容、アーティストとは作品の制作、世界観、そして勿論全ての方々とその時観た作品について語った。

全作品における特徴と傾向

3日間22公演、前夜に海外からのゲストとして日本から小尻健太とカナダからElie-Anne Rossの2作品、合計24作品を観た。私は日本では普段1週間に2、3公演位しか観る事ができないので、約3か月分を4日間で観た計算になる。脳が処理しきれないほどの忙しい、しかしとても贅沢で幸せな日々だった。

ダンスフェスティバルを通していくつかの特徴を見出した。以下、説明を述べ表にまとめ

てみる。

ユーモア、風刺を狙った作品が9つ（どれも効果的）、文章表記・セリフ・歌など特に言葉を用いたものが半数以上の13作品と非常に多く、論理性が強い傾向が窺えた。またほとんどの作品は主張がはっきりとしており、強いテーマ、特に社会における問題意識、例えば銃を思わせる仕草、商品化される人間や生き方、黒人や女性などあらゆる差別への抵抗、虐げられた歴史への共鳴などを表したものであった。そして、「ボーダレスフィールズ」とでも言いたいダンスと他分野融合型作品が増えていて、ダンスのプロ達が演劇・歌・楽器などもプロレベルで行うという見応え十分で独創的なものを観る事ができた。

また時々見受けられるのだが、同じ時期になんとなく創り手達が似ているものを好み、作品に取り入れているものがある。今回のフェスティバルで感じたのは、ミニマムな音や振り（これは世界的にだといえる）、歩き出す・走り出すという様な振り、水を連想させるもの、観客と位置的・精神的にも親密な設定、そしてロープを舞台上部に取り付け振り子のように使用する、または舞台上部から床にある重りにポールを固定したセットを使うなどで、これらをまとめて風潮としておく。

最後に、構成と身体機能について付け足しておきたい。

ここでは作品の構成とは分かり易い展開のため内容を万人受けするようにつくるという事ではなく、表したいものが洗練されて巧みに作られているという意味を示す。また、身体機能とは技術的にも表現的にもスター性のあるダンサーという存在がその作品と合体した時、作品が本来の価値以上の輝きを持つ事があるため、ダンサーの個性が作品に良い影響を与えたものとする。

下の特徴は今回のフェスティバル内に限ったのものであり、評価をしている訳ではなく、全作品の高いレベルで相対的にみた特徴の分布である事を理解してほしい。様々な舞台芸術作品に纏わるゲスト達と作品について語ったが、評価や価値観は本当に様々で個人的な好みがある事も否めない。

Aerowave's	title	論理	主張	他分野融合	風潮	構成	身体機能
1	Landscapes				○	○	
2	FLUX	○	○		○		
3	Waterkind				○	○	○
4	Glory Game	○	○		○	○	
5	Le Piquet			○	○		
6	Sirens		○		○	○	○
7	NEON BEIGE	○	○	○	○		
8	Mercedes mais eu	○	○	○	○		○

9	Live! Not To Be Missed. Touring Regionally	○	○	○	○		
10	AFTER ALL	○	○	○	○	○	○
11	Work in Progress	○	○		○		
12	IHOPEIWILL	○	○	○	○	○	○
13	the body symphonic			○	○		
14	Silhouette Letters		○		○	○	
15	Blue Carousel		○	○	○	○	
16	Black	○	○				
17	babes		○		○		○
18	Lampyris Noctiluca		○			○	
19	Never ALLone	○	○	○	○	○	
20	Shiraz		○		○	○	
21	Dance Like A Bomb	○	○		○	○	
22	GUSH is Great	○	○		○	○	○
23	Amaterski tihotapci/Contrabbandieri dilettanti	○	○		○	○	○
24	Happy Hype		○	○	○		

記憶に残る3作品

Janet Novas”Mercedes mais eu “は、あまりにも大御所の圧巻のパフォーマンス。また、開催地ギリツィアの分断された歴史から、観客を交渉と調停に導いた（私には第4の壁 [虚構と現実の壁] に踏み込むがあまり、個人主義を主張しつつやや強引で相反する権威を感じる部分があった）、Silvia Gribaudi, Andrea Rampazzo “Amaterski tihotapci/Contrabbandieri dilettanti”のレベルの高いパフォーマンス。元ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団で踊っていたFinola Croninが出演し、死に方ごっこ、点滴されながらカートに乗りタバコを吸うなど面白おかしく老人という存在を探求した、Junk Ensemble“Dance Like A Bomb”は残念ながらここでは詳しく述べる事ができない。

また日本であまり観ない作品として、観客の目の前に舞台上部から舞台に置かれた水を入れたタンクにより固定されたポールにあるフックに、次々と体に巻き付けておいたロープを引っ掛け、舞台上にいる人々の繋がりを大きな綾として舞台空間に作り上げたJaro Vinarskyの“ IHOPEIWILL ”。右肘から下のないAristide Rontiniが、大気汚染や水質の悪化により田舎で蛍が消え始めた事がイタリア社会の衰退、消費社会の象徴として例え、表象と真実とを描いた”Lampyris Noctiluca”についてはEUジャパンフェスト日本委員会の私の報告書に載せたのでそちらのサイトを読んで欲しい。

まず今回私があげた特徴を全て押さえていて、沢山のゲスト達からの評価もとても高かった作品**Solène Weinachter “AFTER ALL”**を詳しく説明する。

この作品は死を題材につくられていて、葬儀のおかしな点や気持ちが同調できない部分を率直に観客と共有していた。彼女の実際の体験も基にしているためとても個人的で繊細な感覚を取り扱っていてダンスにする事は困難と思われるが、ダンスとセリフをうまく取り合わせとても巧みに展開されていた。

伯父の葬式に行くのだが、参列者とのキスの挨拶1人つき3回×22人は必要なのだろうか??彼女がダンサーだからと知って葬儀業者がフランク・シナトラの曲『マイウェイ』をかけ踊ってくれないかと頼まれても、それはちょっと微妙.....など彼女はコロコロと表情を変えながら、面白おかしく深刻な内容を子どものように観客に伝える。入場前に花を渡し観客をファンに見立てて交流を進め、プレスリー風の衣装に着替えベニヤの裏から現れるなど小回りの効く美術でスターとは何かを皮肉る。そして黒カーテン、黒椅子の上で横たわりスポット照明を当て浮いた様に見せて、自分が死んだ状態を想像したりする。しかし、母親が亡くなった話になると彼女は気も狂わんばかりに泣き続ける。

途中、ダンスや体を動かす事は死の喪失感の中での心の支えになる事を表したが、一方で死とダンスの両極性にも触れ、実際にダンスパフォーマンスを観ている側に、より現実的な生の実感を芽生えさせるものだった。彼女の語りは独白ではなく観客との共有の上で無理なく構成され、作品の中に人間愛の深さを感じた。そしてその素晴らしい演技はコメディエンヌとしての非凡な才能を飛び越して独特の個性を発揮しており、さらに身体の細やかな所まで行き届いた感覚やステップ、アームスの動きなどダンステクニックとしても非常に高いレベルを提供していた。

新型コロナウイルスのパンデミックで死をより深く考え制作されたこの作品。何人死んだとか何千人死んだとか情報は聞くが、その中の一人が自分のとても大切な人だったらどうなのかと考えると、数字と現実感覚との死のズレを感じざるを得ない。作品タイトルのAFTER ALLは「全てが終わった後」と共に「結局は（なんだかんだ言っても）」とも訳される。この作品は、死んだ人は戻ってこないが私達は死んでしまった人達の想いを抱えながら一緒に生きて行き、喪失感を抱えているのはあなただけではなく皆同じ思いなのだと言さしく教えてくれる。

“AFTER ALL”はとても個人的なものを表現した作品だが、同じように今回のフェスティバルの特徴を押さえつつ社会的な価値観から描き、目の肥えたプロ達の多くが高い評価をした**Production Xx “Gush is Great”**についても触れておきたい。

私は今回のフェスティバルのラインアップを読んだ時、まずこの作品についてダンサーに注目した。パリオペラ座、フランスのダンス音楽院など様々な背景を持つアーティストが集まっていたからだったが、しかし作品はそんなものじゃなかった！

黒いカーテン幕を背景に舞台後方から5人の男女が横一列にとってもゆっくりと前進しながら、Ulysse Zangsの現代的だが一定リズムの選曲された音楽の中、沢山の小道具がダンサーの背後やポケットなどから持ち出されては投げ捨てられて行く。それは、水鉄砲・おもちゃの犬・仮面・お金・小麦粉・クラッカー・トランプ・ナイフ・コーラの空き缶・ワイングラス・骨格標本など...フェスティバル開催地にも関係していたようだ...時に手渡ししながら、時に自分自身で落として行くので大きめの劇場の舞台床はどンドン散らかって行

く。その後、舞台前方まで来た5人は交互に数名ずつ上昇と下降を繰り返すと、ずっと続いていた平衡が崩れ、最後になんと舞台から一列で客席前に身を投げる様に傾き落下する。

前に歩くという振付けだけで、小道具が象徴としての機能を最大限発揮し時間の流れをつくり出していた。そしてさすがレベルの高いダンサー達は一度も視線の方向を変えず、足下も見ず、足裏と隣のダンサーとのバランス感覚だけで舞台を縦断した。実にシンプルな振りだが、舞台上の演者には観客席の暗闇しか見えない状況なので、ダンサーにとってかなり怖い振付けであることを想像して欲しい。

5人はまるで消費社会の中で漂う難破船のように見えた。GUSH(噴出、湧き出る)は、核、ゴミになる商品、ダンス、振りそのものも包括するものなのかもしれない。2023年の作品説明に「それはゲームですか？ 幼少期の怠惰に戻る賭け？ 集団自殺？魚の状態に戻りたいという願望？ 事故、警戒の欠如？ この目的の唯一の確実性は、身体に衝撃を与え、それらを掴み、解放することです。」とあり、消費行為を逆説的に揶揄した文章だと解釈できる。

GREATなこのディストピアに掲げられた旗には、SIAMOTUTTI = We are all と書かれていた。人類の生むものは呼吸も食べ物も物もそして核もゴミばかりで、私達には大きな課題がある。人類の抱えるあらゆる地球規模の危機を見事に揶揄しつつ、例えばその土地独特の物やある職業が消費する物を小道具として置き換える事でこの題材をどの様な問題意識にでも変化させることの出来る古典的な構造を持つ恐るべき作品。それは「ソフトウェアを変え続けることのできる、ハードな内容のハードウェア作品！」といえる。(後日、この作品を公演の噴水で行っている映像を観た。ソフトウェアのみならずサイトスペシフィック作品とする事で、ハードウェアと思われた構成が振付けのみを残しソフト化するというさらなるハードウェアの強固さを感じた。)

“AFTER ALL”、“Gush is Great”はフェスティバルの特徴がよく現れた作品だが、そうではないが私がとても惹かれた**Land Before Time “Waterkind”**もお伝えしておきたい。この作品によって、今回のフェスティバルの特徴を捉えることが必ずしも観客の心を惹き付けるわけではないという事実を確認して欲しい。

グレーのシンプルなシャツ、パンツ姿の男女が細かく響くような音と共にゆっくりと走っているかのように振りが始まる (**Yared Tilahun Cederlund**、音楽も担当した**Joanna Holewa Chronaha**)。女性は跪き地面ギリギリに掌を近づけ水に触れるような手の動きをする。また両手を上げ自転する姿は雨乞いのようにも見え、その後2人は互いに近づき対面すると、接触しない位置で背骨を波打たせる。すると男性が悲しみと怒りが入り交じった複雑な表情をして細かく振動を起し、その姿は創造するために破壊を起こすインド神話のシヴァ神を想起させた。今度は男性だけが跪き顔を洗うかのような振りを行うと立ち上がり、2人揃って広い空間で身体前面を向かい合わせたまま行き来し、それはまるで真っ暗な夜の海の波の満ち引き、または地球の広大な自然を揺らしているかのような感覚を覚えた。男性が片手を額に付け遠くを見渡すと、今度はギリシア神話の水の精セイレーンを思わせる歌声が響く。すると細かいドラムの音と共にまた互いの身体前面に向かい合い仰け反りあったりするが、泣き声のような音の中、2人はわずかの隙間を残し触れる事がない距離のまま抱き合うように終わる。

本来サイトスペシフィックの作品としてつくられたものなので (今回は体育館の中での上演だった)、青空の下で観る事ができたらさらに壮大な美しい自然を感じるのではないか

と考えた。

実は会場へ向かうバスの都合で上演を2回観たのだが、振付けを正確に記憶した所、全体の中で順序だった振りがほぼ3回繰り返されている事に気づいた。なるほどより東洋思想や自然の転生輪廻を感じる振付けだったのだと納得していた。しかしディナーで話しをした際、彼らは即興を基本に振付けしたので意図した訳ではなく、3度繰り返していた事に気づかなかったと言ったため、私は驚愕した。

フェスティバルの中で小尻健太日本の石庭を思わせる様なわびさびの思想に基づいた“Landscapes”と、この“Waterkind”のみが人間以外の生物や自然の存在を感じさせるテーマを扱っており、人間を包括したもっと大きな方向へ導いているように感じるものだった。モーリス・ベジャールの『バクチ』（神を熱烈に信じ愛する事、信愛、献身）を思わず想起し、“Waterkind”という水をテーマにした「静かなるバクチ」を観たようだった。

私は今回のフェスティバルの作品から、ポストコロナ禍を経て、死をもつ身として人間同士が自分自身や社会の中でどのように生きて行くべきなのかと考え、そして強く何かと繋がりたいという気風を感じた。

Aerowave's Spring Forward Festivalは、ダンスをどのように実現化するか過去の知識、経験を分かち合い協力して未来へ挑戦するエネルギーに満ちていて、世界中のダンスに関わる、関わりたい人間達が繋がる場所だった。ダンスは今、その時にしかない演者の身体を感じてこそ観客それぞれに新しい何かを生み出す芸術だ。そこには何もボーダーはなく、ただそこにいる互いの存在が浮き彫りになるため、ダンスに真実を見つける事ができる人間は真実で繋がっているのだ。そこに分断はなく、あるのは対立への強い抵抗感だけだろう。ダンスは全ての人間に開かれた芸術であるから、いずれその繋がりがあらゆる難しさを突破する可能性がある事を大切に培って行きたい。

舞踊評論家 [養成→派遣] プログラムの中で、舞踊評論とは何か・どの様を書くかのみに留まらず、ダンスを支え、牽引し、闘う人々に巡り会う事ができた。国内のみならずイタリア派遣によりさらに世界中の方々と繋がる機会を頂けたのは、助成をしてくださったEUジャパンフェスト日本委員会のおかげなので深く感謝したい。

そして、このプログラムを代表する乗越たかおは日本で初めてこのような形での舞踊評論家育成を行うという偉業に挑み、自身の積み上げた技術、知識、ノウハウ、人脈などの全てを惜しみ無く与えてくださった。2期生として学んだ全てが私の財産であり、それまでの人生で想定することのできなかつた恩恵を受ける機会を頂けた。感謝では表しきれない気持ちでいっぱいだ。

舞踊評論家 [養成→派遣] プログラムでの経験を基により多くの人とダンスという人類が持つ素晴らしい能力を発揮し、私が経験したこのダンスフェスティバルからまたさらに飛び越えて人類がびっくりする様な作品が上演される事をダンスで繋がる方々と培いたい。